



## 「身近な気象の事典」

新田 尚 監修

日本気象予報士会 編

東京堂出版, 2011年5月

279頁, 3500円 (本体価格)

ISBN 978-4-490-10799-9

気象事典としては、本誌の読者の多くはまず「気象科学事典」(日本気象学会編, 東京書籍, 1998年, 637頁, 本体11,429円)を使うだろう。これはやや古くはなったものの、日本気象学会の専門家による裏付けのある書として、専門的な分野の記述や議論に安心して使用できると見なされている。それに対して、気象予報士会の編集により今回出版された「身近な気象の事典」は、「はじめに」に「気象に関心のある一般の方々、あるいは気象の知識に詳しい気象予報士の皆様がお茶の間でテレビを見ながら、新聞を読みながらそして日常生活の中で、ふと気になった気象に関する言葉や疑問に答えられる事典として刊行された」と書かれており、読者対象と目的が異なっている。

一般の方々にお茶の間に置いていただくには、まず、購入しやすい価格であることが必要である。本書のページ数と価格は、上記の「気象科学事典」よりかなり低く抑えられ、よく使われる教科書類とほぼ同程度である。これは、専門家ではないが高い関心を持つ、いわゆる「マニア」の方が1冊の本に支払うことができる価格の範囲内にほぼ収まっているのではないかと思われる。

ただし、多くの方々に頻繁に手にとって親しんでもらうには、買ってもらうだけはいけない。調べたときに「わかったような気分になる」のでないと、継続して使ってはもらえない。そのためには各項目の説明はごく簡潔な方が良いという考え方があるだろう。実際、本書の説明には数式がほとんどない。簡潔な文章のみでその用語の概念が十分に伝えられるかという問題はあがあるが、非専門家の読者にとって親しみやすくしようとする配慮が窺われる。

項目の選択にも、「気象科学事典」との相違点がある。読者対象として気象予報士が含まれていることもあり、最近の気象庁の予報プロダクト関連用語がかなり多く掲載されている。一般読者向けとしても気象

学・気象業務の専門用語以外の多様な用語が掲載されている。例えば「ゲリラ豪雨」のような報道用語、二十四節気・季語などを含む歳時記用語、さらには天文学用語の一部(「しし座流星群」など)が目につく。これらの掲載については反対意見も出そうだが、専門家でない読者が本書を手にする頻度を増やすための工夫のひとつであろう。歳時記等と気象学の関係の観点で記述した図書の出版は近年はあまりないので、若い読者にはかえって新鮮かもしれない。

さらに本書の巻末には付録として、予報用語や過去の顕著な気象災害のリストに加え、つい最近更新になったばかりの、国内各地の気温や降水量等の平年値(1981-2010年)の表が掲載されている。これも、本書をたびたび手に取ってもらおうとの工夫であろう。

ところで、少ないページ数の中に多くの内容を盛り込むなかで、犠牲になっているものもあるようなので、いくつか指摘しておきたい。例えば「シスク(CISK)」の項はあるが「条件付き不安定」の項がない。「シスク」の項の説明の中には「第1種条件付き不安定」の記述があるが、これで本来の条件付き不安定の説明をカバーできるとは評者には思えない。また「湿度」の項と「絶対湿度」の項はあるが「相対湿度」の項がない。「湿度」の項に「相対湿度」の説明はあるが、事典としての利便性を考えれば独立した項目として立ててあった方が良かったように感じられる。ちなみに「渦度」「絶対渦度」「相対渦度」の各項は全部ある。

基本的な用語以外で追加されている項目にも、やや首をかしげたくなるものが見受けられる。例えば「特別観測実験」の項の説明がT-PARC2008に限定されているが、特別観測実験と称されるものはこれに限らないだろう。これを書くのであればむしろT-PARC2008を項目名にした方が良かったのではないだろうか。また「平成の5大台風」という項があり、マスコミ用語とされているがインターネットで検索しても見つけれないなど、評者には用語の使用例(または用語の存在自体)の確認ができないものもあった。なお、この「平成の5大台風」や上述の「ゲリラ豪雨」など一部の項には、マスコミ用語である(あるいは気象学の専門用語ではない)ことが付記されているが、このような注釈をつけるのであれば、歳時記用語や天文学用語等も気象学の専門用語と区別できるようにしておくのが良かったのではないだろうか。

このように、利便性と完成度を高める余地がまだか

なり残っているように見えるのが惜まれるが、限られたページ数にこれだけ多様な項目を収め、なおかつ平年値更新に出版時期を合わせた（おそらく偶然ではないだろう）のは関係者のご苦勞が多かったことと拝察し、ご努力に敬意を表したい。多様なニーズに応え

ることと専門性を維持することの両立は困難なことではあるが、より適切な情報発信をする努力を気象予報士会という専門家集団として続けてほしいと切に願う。

（気象研究所台風研究部 北島尚子）